



## 道内理工系三機関合同による異文化交流を通じた国際共修授業の実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Intercultural Exchange, Regional Colleges, Sharing International Students, Training Camp 作成者: 小野, 真嗣, クラウゼ小野, マルギット, 栗山, 昌樹, タケ, ディヴィッド メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009824">http://hdl.handle.net/10258/00009824</a>

## 道内理工系三機関合同による異文化交流を通じた国際共修授業の実践

小野 真嗣\*<sup>1</sup>, クラウゼ小野 マルギット\*<sup>1</sup>, 栗山 昌樹\*<sup>2</sup>, タケ ディヴィッド\*<sup>3</sup>

## A Teaching Report on Intercultural Exchange Lessons with Japanese and International Students among Three Technological Institutions in Hokkaido

Masatsugu ONO, Margit KRAUSE-ONO, Masaki KURIYAMA and David TAQUET

(原稿受付日 平成 30 年 12 月 20 日 論文受理日 平成 31 年 2 月 1 日)

## Abstract

This paper discusses how to conduct collaborative classes between Japanese and international students in regional areas so as to make them more motivated in their foreign language competency and its related cultural understanding. Students in urban cities have lots of opportunities to encounter foreigners and international students or their own cultures because there is the fact that almost half of the international students go to universities in big cities like Tokyo and Osaka, while students in regional areas have less opportunities to directly meet such foreigners than the students in urban cities do. The authors have tried building such a similar opportunity for Japanese students to meet foreigners in regional areas by sharing the international students as human resources in each regional institutions so that they can communicate in their foreign languages. In this paper, the authors focus on extracurricular collaborative lesson camps among three regional institutions of technology.

Keywords : Intercultural Exchange, Regional Colleges, Sharing International Students, Training Camp

## 1 はじめに

本稿では、都市部から離れた地方においても異文化理解・国際交流に積極的に取り組める空間を提供しながら、外国語運用力が弱点と言われる理工系学生に対して、多言語・多文化環境の構築を行い、外国語運用を促進させ、異文化理解力の涵養を図ることを目的に行う試行としての教育実践事例について述べる。大都市圏に比べて地方には外国人が少なく、それに比例して地方大学においても外国人留学生の在籍数が極めて少なくなり外国人との異文化交流の機会が低下する。地方大学生に対して、機会提

\*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

\*2 苫小牧工業高等専門学校 創造工学科

\*3 函館工業高等専門学校 一般科目人文系

供を図り、上記目的を達成できるようにするため、本研究は地方の各校に属する留学生を教育活用の人的資源として捉え、それを共有活用させながら、異文化接触機会の提供や語学力向上を目指すものである。隣接する地方大学間の連携による留学生広域インタラクション空間の創出を通じて、語学力を養う外国語学習の再起を試み、コミュニケーション上の実践性を有する学生を育てる教育研究の位置づけとしている。

## 2 社会的背景

日本における外国人留学生は年々増加している。本研究の取組が開始された2015年時点の日本学生支援機構(JASSO)がとりまとめた外国人留学生在籍状況調査結果によると、2011年では163,697人であった人数が、2015年には初めて20万人を突破し208,379人となった。しかしながら、その半数以上となる52.7%(114,778人)の留学生は関東で就学しており、北海道では国内総数のわずか1.4%(2,974人)である。さらにその北海道内の内訳は、およそ半数の52.7%(1,570人)が北海道大学へ通い、この数値は慶應義塾大学の1,418人、立命館大学の1,587人と、大規模私立大学とほぼ同数であった。一方、室蘭工業大学(以下、本学)は当時149人であり、国内総数の0.07%が在籍していた状況であった。この数値から見ても、大都市圏・大規模の大学は、留学生との異文化交流は容易に図ることができる地盤があり、その恩恵を享受できる一方で、地方大学単独では数の上でも厳しく、同じ理工系教育機関である工業高専では教育の国際化推進がさらに深刻であり、地方で異文化交流を促進していくには非常に限られた環境の中で図っていかなければならないことが数字の上でも明らかとなった。

異文化交流がもたらす外国語学習への動機付け効果は先行研究でも報告されている。北海道内に限ると、中川(2012)は異文化接触の効果は学業のみならず生活面における積極性を促す要因となっている点を指摘している。本研究は、留学生との異文化接触がもたらす外国語学習や運用力向上の効果を期待する中で、限られた少人数の留学生が在籍している地方大学や高専が隣接校と連携しながら、教育上の人的資源としての留学生を広域に共有活用し、留学生との遭遇機会を高め、授業効果を向上させることを目的としている。本研究では、その広域活動圏の形成には、(1)に示す大きく3つの方法を取ることとする。

- (1) a. 正課通常授業や課外合宿研修などの集会的会合による対面上の接触
- b. ウェブ掲示板やチャットシステムなどのSNSを用い、文字や画像等の共有による非同期の接触
- c. Skype等のテレビ会議システムを用い、遠隔地でも直接的な発言や応答による同期性のある接触

遠隔地間の授業では情報技術を最大限に利用したテレビ会議システムによる授業が正課にも組み込まれつつあり、様々な問題は抱えながらも、単位認定が行われるほど運用可能な時代となった。本研究においても、地方大学・高専が異文化交流において不利な点を解消しつつ、学生が国際的視点を養う環境整備として、(1)bやcは非常に強力なツールと言える。整備が進めば、都市・地方を問わず、また世界と直接接続することにより、接続した地点が異文化・国際交流の拠点校として形成され、外国人との遭遇機会の差異や優劣を少なくすることができるという期待が持てる。

一方で、遭遇機会の確保に向け、(1)bやcのようないわゆる仮想空間上の出会いには抵抗感も多い。石川・松田・小野(2009)では日本とニュージーランドの間におけるテレビ会議システムを用いた国際遠隔授業の実践事例について述べているが、教員主導により初回授業の初顔合わせには自己紹介に終始してしまい、視線等の態度面や話題の発展性においてコミュニケーション上の不自然さが残ることが指摘されている。そこで、本研究では長期的な交流を企図し、初対面の重要さを考慮して、(1)aに挙げる合宿研修を交流のスタートとし、(1)bやcに繋げて交流を維持させることを計画した。本稿では、(1)aの活動について焦点を絞り、次節以降、その取組事例を紹介する。

### 3 対面による大学間異文化交流の試行実践

2017年および2018年の2か年においては、地方における異文化遭遇の機会創出と継続参加促進に努め、遠隔地同士であっても身近な存在であるように感じられるような空間作りに注力した。道内理工系三機関には本学の他、苫小牧工業高等専門学校（以下、苫小牧高専）と函館工業高等専門学校（以下、函館高専）が加わり、道南の室蘭・苫小牧・函館の各都市間を、各所属校の外国人留学生の共有活用を通じて、異文化交流が図れるものとした。(1)a.で示す集会的会合を実施するにあたり、異文化交流を図る上でのテーマを設けることとした。各年度のテーマは(2)に示すものとした。

- (2) a. 2017年の交流テーマ： 各港湾都市の特徴の理解と異国情緒の街函館の史跡を辿る  
b. 2018年の交流テーマ： 世界の自然災害への理解と防災減災への意識向上を図る

次節以降、各実施年に分け、実際の実践事例を述べることとする。

#### 3.2 交流試行実践

##### 3.2.1 室苫函三機関合同異文化交流 in 函館

初年度となる2017年は各機関の都合や著者ら担当教員の準備都合により、函館高専を会場校に合同実施することとした。函館は開国の地であり道内でも長い歴史を有し、国際性に富む土地柄であることが一般的に伝えられていることもあって候補の選定に繋がった。初年度はその後の交流の持続可能性を考え、本学や苫小牧高専の参加学生については1泊2日の日程とし、函館高専生が現地ホスト役となり、交流プログラムを実施した。当該プログラムに関する情報をまとめたものを表1・2に示す。

表1 函館開催時のスケジュール

日付	時間帯	項目	内容
12月2日 (土)	8:30-12:45	バス移動	苫小牧発、室蘭経由、函館行き借上バス。車内昼食
	13:00-14:30	交流活動1	全体説明、自己紹介を兼ねた「国際人とは何か」をテーマとしたジグソー法による情報交換活動
	14:45-16:15	交流活動2	iPadを用い、指定された国・地域を調べshort presentationを行う
	16:30-17:00	ふりかえり1	1日目の活動を通じて学習した内容の確認
	19:00-21:00	課外自主活動	夕食後、一部有志による函館西部地区倉庫群界隈の自主散策
12月3日 (日)	8:45-10:00	特別講義	函館、室蘭、苫小牧の各港湾市の都市計画の比較
	10:15-11:30	交流活動3	異文化理解のための体験型アクティビティ
	11:30-12:00	昼食	ホスト役函館高専生の英語によるluncheon presentation (函館散策案内)
	12:00-15:00	校外バス研修	学生間交流としての函館史跡の散策
	15:00-15:30	ふりかえり2	全体活動を通じて得た異文化に対する姿勢について
	15:30-19:00	バス移動	函館発、室蘭経由、苫小牧行き借上バス。到着後解散。

表2 函館開催時の参加者内訳

	本学	苫小牧高専	函館高専
日本人学生 (学年)	男3名・女1名 (学部2年・3年)	男0名・女2名 (高専3年)	男2名・女1名 (高専4年・5年)
外国人留学生 (出身国)	男2名・女1名 (マレーシア、中国)	男3名・女0名 (マレーシア、モンゴル、カンボジア)	男1名・女2名 (マレーシア、モンゴル)
教員 (出身国)	男1名・女1名 (日本・ドイツ)	男1名・女0名 (日本)	男1名・女0名 (フランス)

プログラムの概要について述べると、1日目の交流活動1では筆頭著者である小野が担当し、ジグソ

一法によるグループ活動を通じた交流プログラムとした。日本人学生と外国人留学生がおおよそ半数ずつであることに配慮し、指導者側は使用言語の位置づけとして日本語と英語の両言語を併用する形をとった。学生達のグループ活動については日本語使用に重きが置かれた部分もあったものの、日英両言語使用の姿勢は十分に観察できた。実際の活動内容としては、はじめは出身校による地域ごとに3グループに分かれて地元を代表するキーワードを出し、グループ内の情報共有を図った上で、3グループを地域・国籍・男女比に配慮して均等になるように分けて、それぞれ自らが発表者になるような仕掛けを作り、口頭発話による交流につなげた。図1は地域内グループにおける意見集約(左)と均等グループにおける地域文化比較に用いた付箋意見の例である。はじめに身近な地元に関する話題とした後、抽象度を上げ、異文化交流の議論として用いられやすいものとして「国際人とは何か」を上げ、同様の方式で議論を重ねた。確立した解答が決してある訳ではないことを検討するには意見交換が必要であり、そのことを促す程度の良い課題であったと判断している。学生意見は本節では控え、後節にて触れることとする。

続く交流活動2ではタケが担当し、ICTを用いたプレゼンテーションの活動を通じ、各人がiPadを用いて画像を効果的に用いながら、個人の関心事や各国に関する自主調査に基づく情報提供として画像を多用したスライドを構成し、マルチメディア機器を用いたプレゼンテーションを行う活動を行った。言語は英語を基本とし、5分の発表の後、質疑応答を行う活動とした。活動の様子を図2に示す。

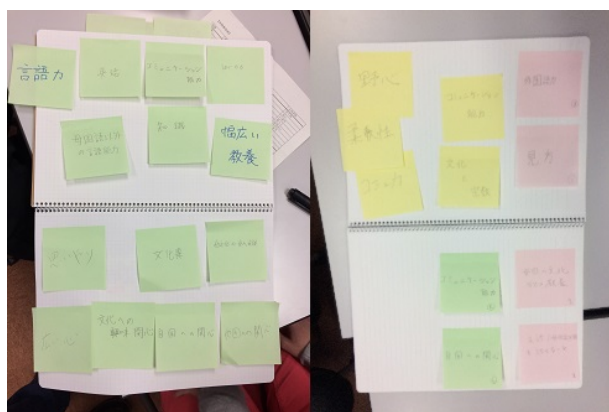


図1 ジグソー法の学習活動時の意見付箋



図2 iPadによるプレゼンテーション指導

翌2日目の初めには特別講義を設け、栗山が担当した。室蘭、苫小牧、函館の三地域に共通する事項である港湾整備に基づく都市計画の比較について歴史的な視点から講義を行った。栗山は著者らで構成される研究グループでは唯一の工学系教員であり、土木工学を専門分野とし、特に都市計画について実務経験を有する教員である。理工系学生で構成される異文化交流では、個々の学生の専攻分野が機械、航空宇宙、電気・電子、情報、化学・生物、土木・建築と多岐に分かれていることから、各地域文化の比較に焦点を当て歴史的な視点からアプローチを試みる異文化交流として、参加者の専門背景の差に配慮しつつ、理工系の異文化交流に関する話題提供としたものである。講義の様子は図3に示した。

続く交流活動3はクラウゼ小野が担当した。異文化理解においては他者との距離や認識に文化的な差異が生じることから、そのことについて体験的に理解を迫る活動を行った。体を動かしながら教室を移動するアクティブな活動として取り入れたものであり、その際に生じる発話を通じて、互いの認識を深め距離を縮める活動とした。実際、出会って2日目であり、本学と苫小牧高専の学生は宿泊をしている関係で自主的な活動により幾分交流は深まっているものの、ホスト校である函館高専の学生とはぎこちなさもあった。アクティビティの一つとして、チームワーク力とリーダーシップ性を問うアクティビティを行い、それは参加者一同が立ってギリギリ入ることのできる四方形のブルーシートを転覆船に見立て、そのシートから落ちない(外れなの)ようにシートをひっくり返す活動である。ぎこちなさもあったものの、本活動により verbal/non-verbal のコミュニケーションを通して、良好な関係が築かれ、午後からの活発な散策活動への布石となった。



昼食時間もコミュニケーションの時間として最大限の活用を試みた。事前にホスト校である函館高専の学生には、函館市街案内に関する英語によるプレゼンテーションを依頼しておき、luncheon presentationとして実施した。学校ごとに固まって静けさの中で食事を行うことの回避をねらった活動であり、プログラム中において終始コミュニケーション活動に参画する工夫としての位置づけである。本学や苫小牧高専における学生、とりわけ外国人留学生には函館の地が初めてとなる者も多く、地元の視点による情報も得ながら、午後の校外バス研修への事前指導的な活動となり、学生間コミュニケーションとしては一定の効果が認められるものとなった。図5はluncheon presentationの様子を、図6は校外バス研修時の集合写真撮影の様子を示すものである。

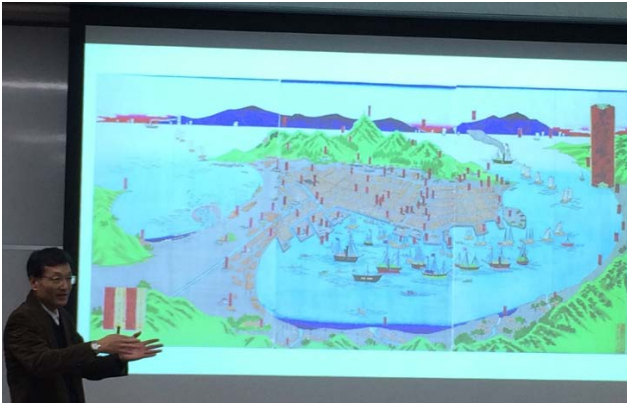


図3 函館、室蘭、苫小牧の都市計画説明



図4 異文化理解への態度に関するアクティビティ



図5 地元学生による函館史跡のプレゼンテーション



図6 2017年参加者一同の写真

以上が函館開催の異文化交流研修であるが、後節でも紹介する学生意見にも挙げられる通り、講義や授業的な認識を持つ学生が多く、参加者の充実感は一応に得られてはいるものの、学生が能動的に参加できたかどうかという点では反省点が残る研修であった。そのため次節で述べる大滝開催の研修では、学生の能動的参加を促す工夫を設けることが最大の改善点となった。次節では、(2)b に示すテーマに基づく活動について述べる。

### 3.2.2 室苫函三機関合同異文化交流 in 大滝

二年目となる2018年は本学がホスト役を担った。会場には本学が最寄となる道内国立大学・高専の共同利用研修施設である大滝セミナーハウスを活用して経費節減に努め、前年度の交流実績を踏まえて1日延長し2泊3日の日程とし、教員も含め参加者全員が寝食を共に過ごす形態とした。折しも実施直前の9月3日には北海道胆振東部地震に見舞われたが、本学が展開する研修プログラムが当初より予定していた短期留学生向けに活動し実績のある洞爺湖・有珠山地域方面への自然環境見学の行程を基本とす

るものであったことは、直前の地震災害自体が参加学生にも直接自身に降りかかる（かかった）出来事として理解を深めやすくなる一因ともなった。一方、前年度の反省として日英両言語使用を基本とするものの、外国人留学生で日本語に堪能な者には日本語を使用する傾向が強かったことから、日本人学生の外国語使用の強化に向け改善する目的で、日本語運用力を持たず英語を主体としてコミュニケーションを図る本学博士後期課程留学生に協力を仰ぎ、事実上の指導スタッフ増員として、外国人との外国語による異文化交流のさらなる環境整備に努めた。当該プログラムに関する情報は表3・4にまとめた。

表3 大滝開催時のスケジュール

日付	時間帯	項目	内容
10月6日(土)	8:30-12:00	JR/バス移動	苫小牧発、室蘭/伊達経由、大滝行き。函館～伊達間はJR利用。
	12:00-13:00	昼食	施設内にて一斉昼食。食事前に施設利用オリエンテーションを実施
	13:00-14:30	研修授業1	全体説明、自己紹介を目的とするジグソー法によるアクティビティ
	14:45-16:15	研修授業2	自然災害に関する意識付け、災害経験の有無に関する情報共有活動
	16:30-17:00	ふりかえり1	2日目の校外バス研修の予備知識の確認としての既習内容のふりかえり
	18:00-21:00	夕食・親睦会	自由な学生間交流の場とした
10月7日(日)	8:00-8:45	起床・朝食	始業前の支度については自由時間とした
	9:00-14:00	校外バス研修	被災地区や噴火口等の洞爺湖ジオパーク、拠点情報のあるビジターセンター施設見学。昼食は各自
	14:30-14:50	ふりかえり1	校外バス研修により見学した地域の情報のおさらい
	15:00-16:50	研修授業3	本学博士留学生出身国における事前災害事例の紹介。
	16:00-17:00	研修課題提示	本人の関心に基づくグループ分けの後、模造紙とマジックにより工学的視点による防災減災の手段に関する発表に向けたポスター制作の課題提示
	18:00-19:00	夕食	グループ活動の縛りを設けてグループ内交流の増進を図った
19:00-22:00	自由(発表準備)	合宿の利点を生かして、食事後の自由時間も用いて発表準備を行った	
10月8日(月)	8:00-8:45	起床・朝食	始業前の支度については自由時間とした
	9:00-10:30	発表準備	主に発表におけるポスター制作、発言要旨の準備に充てた
	10:30-12:00	研修発表会1	3グループの発表、全て英語で実施、質疑応答あり
	12:00-13:00	昼食	特に縛りは設けずに一斉に昼食をとった
	13:00-13:30	研修発表会2	1グループの発表、全て英語で実施、質疑応答あり
	13:30-14:00	ふりかえり2	全体活動を通じて得た異文化に対する姿勢について確認した
14:30-18:00	JR/バス移動	大滝発、伊達/室蘭経由、苫小牧行き。到着後解散。	

表4 大滝開催時の参加者内訳

	本学	苫小牧高専	函館高専
日本人学生 (学年)	男4名・女0名 (学部1年・2年・3年)	男2名・女1名 (高専4年・5年)	男2名・女1名 (高専5年)
外国人学部留学生 (出身国)	男2名・女1名 (マレーシア、中国)	男2名・女1名 (マレーシア、モンゴル)	男2名・女1名 (マレーシア、モンゴル)
外国人博士留学生 (出身国)	男4名・女0名 (インド、インドネシア、タイ、ベトナム)	/	
教員 (出身国)	男1名・女1名 (日本・ドイツ)	男1名・女0名 (日本)	男1名・女0名 (フランス)

函館開催時と比較し、プログラム構成の大きな違いは、表4で示す通り、外国人博士留学生の参画である。研修プログラムの主たる運営者は著者ら研究を担う教員団であるが、外国人博士留学生には国際事例の情報提供者として出身国の自然災害に関するプレゼンテーションを依頼し、準講師役として参画



した。また、2日目夕刻以降のポスター制作にあたり、外国人博士留学生の出身国の災害事例に焦点を絞り議論を進めることで、グループ内学生への内容面・言語面（英語）のサポートを行い、ポスター発表に至る過程のグループ内助言者の役割を担ってもらった。結果として、意思疎通のためには英語が必須となり、観察からも英語運用頻度が向上することとなり、実践的なコミュニケーションの創出につながる事となった。教員は学生の諸活動を観察する立場にシフトし、オブザーバ的な役割や、グループ活動が行き詰った際のファシリテータ役として参画することとなった。

研修日程の性格として、初日から2日目前半にかけては、自然災害に対する自己の認識を再確認し、不足する事例情報に関して収集するプログラムとした。そのため、まず第一に図7で示すように教室内において各人の自然災害に対する認識や経験について整理を行い、その上で図8・9に示すように実際の被災地区を直接目撃することにより、被害の深刻さをはじめ、災害に対する意識付けや正確な情報に基づく議論の姿勢保持につなげた。また、外国語使用や国際的事例の観点から、図10に示すように外国人博士留学生による英語を通じた事例を紹介してもらい、世界における自然災害の共通点、類似点、相違点について自己認識を深めることとなった。



図7 地震災害時の情報交換の様子



図8 洞爺被災地区の見学(国道)



図9 洞爺被災地区の見学(集合住宅)



図10 講師役留学生による各国事情の講話

このように研修課題を与えて課題取組を行わせる前までに、円滑な交友関係の構築、議論や解決法を探る議論のための知識の整理等の事前準備に約1日を費やすこととなった。研修課題の提示後は食事時間や自由時間の区別なく、グループ内での情報収集や意見交換が促され、学生主体の活動が活発化し、本来の目的である外国語を用いた異文化交流機会の創出の理想的な形となった。図11は夕食を挟みつつ、施設内にある食堂の広いスペースを活用しながら継続してグループ内活動を行う様子を示す写真である。図12は教室のホワイトボードを利用しながら外国人博士留学生の指導の下で議論を行う様子を示す写真である。どのグループも外国人博士留学生の助言やサポートの有る無しにかかわらず、深夜ま



で自主的に活動を行い、活発な議論を行っていた。



図 11 2日目食事後のグループ活動(発表準備)



図 12 2日目食事後のグループ活動(発表準備)

最終日となる3日目は起床後に朝食を済ませた後、図13・14に示すように各グループに1枚配布した模造紙を用いて発表ポスターを制作する活動とした。前年度の函館開催時の交流研修では、iPadを用いたICTを用いたプレゼンテーションを試みたが、グループ内で口頭による議論を通じたプレゼンテーション準備という側面は弱く、この点を改善する必要がある。本学FD研修等にも用いられるグループ活動手法を参考にしつつ、1つの共同プロジェクトを意識化させる上で、模造紙によるポスター制作活動を取り入れることとした。



図 13 ポスター制作中の発表原稿の準備

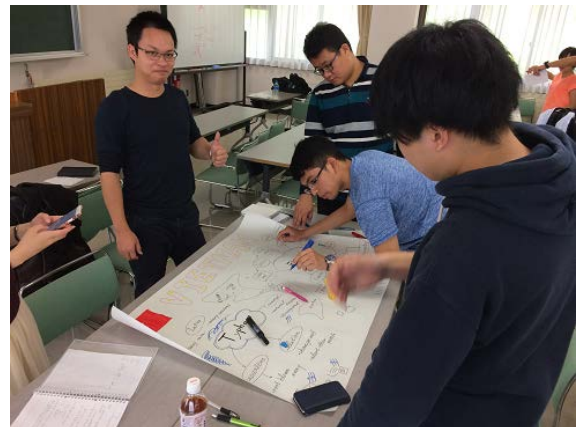


図 14 ポスター制作



図 15 英語による発表と質疑応答の様子

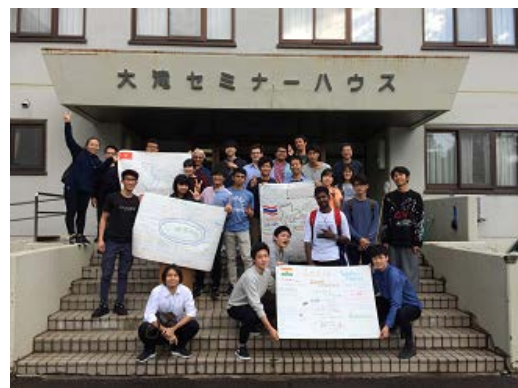


図 16 2018年参加者一同の写真

図 15 はグループ発表の様子を示す写真である。正課で同様の発表を行う以上に質疑応答についても活発に行われたが、寝食を共にして前日までの 2 日間終日に渡る交流によって互いの友人関係も深まっていることが、円滑で活発な質疑応答に繋がった可能性も高いと考えられる。図 16 は研修の全日程が終了した後、参加者一同が制作したポスターとともに全員が映った写真である。

### 3.3 結果と今後

事後には研修参加報告書を義務付けた。参加者からは数多く意見が寄せられ、代表的な主だった発言を開催地毎に以下に示す。

#### 3.3.1 函館開催研修に対する学生意見

研修報告書において不満に関する発言は見られず、参加により学習効果について述べられていたものが多かった。学生の意見を(3)~(6)の項目に整理し記載する。留学生の発言による著しい誤文以外は原文ママである。

##### (3) 知識増強に関する意見

- ・ 欧米圏の情報は自分から積極的に集めていましたが、アジア圏の情報は自分から集めるということあまりしていなかったのが今まで持っていたイメージが大きく変わりました
- ・ フランス、中国、マレーシア、カンボジア、モンゴル各国の文化を学習できた。各国のプレゼンテーションで各国の賛否両論を教わった。国の文化にとしてできるものと禁忌されているものと共に存在していることがわかった
- ・ 「国際人」の定義を室蘭工業大学のみんなで考えて、さらに苫小牧高専と函館高専の方々と意見交換して、世界の人々と接触するとしたら、何が大切であるかを考えた
- ・ 家庭、国籍、男女の違いに伴う異文化を触れ合うことができた。チームワークとリーダーシップが活かせるアクティビティも行った
- ・ 勉強は本からのものだけではなく、実際の体験と交流も不可欠の一環です。他の人の直接の意見交換も大切だと思います。「経験から勉強する」ということは今回とても理解した

##### (4) 発表過程に関する意見

- ・ 授業中でも、授業外でも、それぞれの国の文化について話しました。室蘭工業大学で私はモンゴルの方には出会ったことがなかったので、出会えて嬉しかったです。生活や文化を直接聞くと知っているも本当にそうなんだという実感がわきました
- ・ 異文化の人と交流はどんな感じですか？ 自分と違う考え方の人に対して、どんな言葉で説明するほうがいいですか？ 今回の研修を通じて、話し方と聞き方が理解できました。

##### (5) 機会提供に関する意見

- ・ 今までは、欧米圏の人たちとの交流が多かったので今回のように中国、モンゴル、マレーシアなどのアジア圏の人たちとの交流はとても有意義なものになりました
- ・ もう少し長期で深くかかわることが出来るプログラムがあれば良いなと思いました

##### (6) 言語使用に関する意見

- ・ 日本人に比べて、(外国人は)自分が学んだ英語や日本語を積極的に使い間違えることを恐れず、間違いを指摘されたら素直に受け止め修正しているなと感じました
- ・ 留学生の私には日本語と英語は外国語である。その大切さはもし通じる言語を知らなかったら、伝えたいことが通じなかつただろう。さらにコミュニケーションが難しくなるだろう。逆に外国語を学ぶことでは多様な文化、場所、生活様式を知ることができて、人生を変える経験を提供できる

- ・他国の人々とより良いコミュニケーションができるように、広い心、他人への思いやり、幅広い教養など「国際人」に不可欠なものをこれから身に付けたいと思っている

### 3.3.2 大滝開催研修に対する学生意見

同様に大滝開催の研修についても研修報告書執筆を依頼した。参加により得られた学習効果については前節同様に(7)~(10)の項目に整理し記載する。こちらも留学生の発言による著しい誤文以外は原文ママとしている。

#### (7) 知識増強に関する意見

- ・今回の交流会では、主にインド、ベトナム、タイ、まだインドネシア、四つの国をめぐる、東南アジアの情報を収集しグループで発表をしました。今回は初めてこの四つの国から来た人たちとの交流を取りとても有意義でした。東南アジア圏の情報は自分から集めて今まで持っていたイメージが大きく変わりました。
- ・大滝研修を通じて、日本・タイ・インド・ベトナム・インドネシアの自然災害を知ることができましたマレーシア出身の私は隣国のタイの災害状況すらわからなかった
- ・実際に洞爺湖の有珠噴火跡地と有珠山ジオパークに行ってみ学したら、自然災害で発生した被害は深刻で、長い時間が経っても消えないことがわかりました

#### (8) 発表過程に関する意見

- ・前は授業形式のアクティビティが多かったと思います。一方、今回は4人の博士課程の学生下で、ポスター作りを通して、異文化をより身近く実感することができました。
- ・タイのグループの「残業」が最も長かったが、その理由はオリジナルの対策方法をみんなで考えたいからでした

#### (9) 機会提供に関する意見

- ・期間変えず会う機会を増やして、研修以外のところからでも互いにコンタクトをとれるようにしたいと思いました。
- ・何名かは昨年も参加されていた方々だったので一年ぶりの再会となり、話も弾みました
- ・昨年は時間が少ないこともあって話し合いの時間が足りないように感じていました。しかし、今年は1日伸びたことでグループワークの時間が多くとれ、課題に向けて各々自分の国と比較しながら話し合い、災害に対してどう思っているのか一人一人の意見を言い合う事ができました

#### (10) 言語使用に関する意見

- ・英語はどれだけ大事なことか理解し、これからも英語を頑張ることを決めました
- ・他の英語圏ではない国から日本に来た留学生たちはみんな英語がペラペラでびっくりした
- ・今回の研修のように様々なアジア人の人たちが集まってそれぞれがお互いに英語で語り合っている姿を目にするだけでも英語の勉強に対する意欲が高まり、母国語が英語でないのにも関わらず英語をスラスラ話せるアジア人の姿は日本人にとって良い意味で刺激的である
- ・皆話す相手によって言語を変えているなと思いました。同じ母国の人と話すときは母国語を使っていて、外国人とは英語を話したり、日本語を話したり、切り替えができていたのを見てただただすごいなと思いました

一方、準講師役を担った外国人博士留学生からは、以下のような意見が述べられた。

#### (11) 外国人博士留学生からの意見

- ・*I am presenting floods due to heavy rain in big cities in Vietnam. In my group are two Japanese students, a*

*Malaysian friend, a Chinese friend. Students have the ability to use two languages, so communication is easy and fun. We have heated discussions and many questions are raised about environmental issues and solutions.*

- *After returning to Otaki house from Toya Giopark, we present the disaster in four countries, Indonesia earthquake, sea level rise in Thailand, flood in Vietnam and desertification in India. At night we prepare poster design for the next day.*
- *I have been joined the English and cross culture camp for couple times while I am studying at Muroran-IT. It was impressed to cooperate with young generation not even the Japanese but also those international students who studying in Hokkaido.*
- *On my view point, the activity has been completed successfully on behalf of volunteer and group leader. According to group activities, sine we met each other at the first some students were shy but after group session began, they open their mind and trying to learn more about international culture by using English.*
- *It was not about science knowledge view but the most important was surviving by speak English. I believed they realized how important an English is. Also, they will change vision of using an English to explore their world.*

#### 4 おわりに

本稿は現在進行している道南三機関異文化交流の進捗について実践例を紹介するに留めている。今後さらなる教育的な評価を詳細も分析する必要がある。次年度となる 2019 年度はプロジェクト最終年度でありこれまでに培った集会的会合による対面交流から情報機器を駆使した(1)b や c への活動とし、交流をもとに仮想空間上での次なる交流へつなぐ本研究の核心へつながる活動となる。本稿で述べたように、参加学生の意見からも本活動は有意義な活動と捉える。引続き、異文化交流に興味関心の高い地方大学学生にも良い機会を提供できるよう努めていきたいと考えている。

#### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K02921 の助成を受けたものです。

#### 文献

- (1) 石川 希美, 松田 奏保, 小野 真嗣, 高専における実践的英語コミュニケーション活動を中心とした海外遠隔授業の取組み —英語が使える技術者の養成を目指して—, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, 28, 2009, p.25-34.
- (2) 高橋美能, 国際共修授業における言語の障壁を提言するための方策, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 42, 2016, p.123-139.
- (3) 独立行政法人日本学生支援機構, 平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果, 2016 [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2015/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html)
- (4) 中川かず子, 日本人学生と留学生の異文化交流 —異文化接触、協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容—, 独立行政法人日本学生支援機構留学交流, 13, 2012, p.1-10.